

きゆうかいようてい
【旧魁陽亭】



創業は安政初期に遡るといわれる、北前船の船主や商人たちが利用した料亭。

きゆうきたはまち くそう こぐん
【旧北浜地区倉庫群】



北前船の船主が北前船で運んだ物資の保管のために建造した大規模な倉庫群。(画像は旧右近倉庫)

ひよりやま
【日和山】



北前船の船乗りたちが出港前に日和をみた場所。北海道で2番目に建設された近代的な灯台。

「小樽市」

ストーリーを構成する主な文化財と地域活性化のための取組

北前船ストーリー船上講座

小樽市では、日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間く北前船寄港地・船主集落」の認定を記念し、北前船ストーリーの魅力を伝え、普及啓発を図るため、現代の北前船といえる新日本海フェリー小樽く舞鶴航路の船上において、令和元年8月、乗船客を対象とした北前船ストーリー船上講座を実施しました。当日は、午前と午後の2部構成で約200人が受講しました。

【講師】

国立大学法人 小樽商科大学
グローバル戦略推進センター
研究支援部門 地域経済研究部
学術研究員 高野宏康 氏



いしかりはちまんじんじや とり い
【石狩八幡神社鳥居】



文化10年の銘。兵庫県産の白御影石でつくられており、北前船による瀬戸内とのつながりを伝えています。

こたん じんじや みこし
【古潭神社の神輿】



明治13年、大嵐の被害を逃れた「久吉丸」の船主が大阪から神輿を運び古潭神社に奉納したもの。

あつた じんじや ふな え ま
【厚田神社の船絵馬】



北前船の航海の安全を祈願して奉納された船絵馬。「幸徳丸」「久徳丸」の船名が記載。

「石狩市」

ストーリーを構成する主な文化財と地域活性化のための取組

宝船で地域を学ぶ

道の駅石狩「あいろーど厚田」には明治25年の厚田の様子を伝えるジオラマ「北前船と鯨漁場」が展示されています。精巧な船や積み荷は石狩市郷土研究会の石黒隆一さんと妻の美香子さんが、北前船を迎える表情豊かな人形たちは石狩市浜益区在住の八田美津さんが作ったものです。当時「宝船」として北前船を待ちわびていた人々の喜びを今に伝えています。

平成30年には「北前船こども調査団」として石黒さんが企画・講師を担当し、石狩市立生振おやぶ小学校で北前船の歴史を伝えるワークショップが行われました。その中で北海道のニシン粕が瀬戸内の綿の栽培の肥料として使われ、日本の近代化を支えた繊維産業発展の基礎を作ったという歴史を学び、それをきっかけに岡山県倉敷市の下津井しもつ小学校と交流を行っています。



▲道の駅石狩「あいろーど厚田」と展示されているジオラマ



2019
10 / 19 土曜日

セミナー
時間 13:00~17:00
場所 ウィングベイ小樽内
イオンシネマ小樽

交流会
時間 18:30~20:00
場所 小樽朝里クラッセホテル

2019
10 / 20 日曜日

小樽市から石狩市へのバス移動研修
時間 8:00~12:00
場所 祝津パノラマ展望台・石狩湾新港
道の駅石狩「あいろーど厚田」

フォーラム
時間 13:20~17:30
場所 石狩市花川北
コミュニティセンター

レセプション
時間 18:30~20:00
場所 シャトレーゼ
ガトーキングダムサッポロ



10 / 19 セミナー (小樽市)

令和元年10月19日、20日に第28回北前船寄港地フォーラム in 北海道 小樽・石狩が開催されました。

このフォーラムは、江戸中期から明治にかけて「北前船」で結ばれた全国各地が連携して地域振興を目的に開催しています。

「北前船往来」日本の繁栄と近代化を支えた絆をふたたび」をテーマとして、19日には小樽市で、第2回北前船研究交流セミナーが開催され、全国から約330人が参加しました。

当日は、主催者挨拶及び来賓挨拶の開会セレモニーに続き、活動事例発表として、小樽市立潮見台中学校文化部の部員9名による「中学生が、見た、知った、考えた北前船」と北海道未来創造高校の生徒3名による「私たちが考える日本遺産北前船の未来」と題する発表が行われました。

続いて、東京国立博物館館長の銭谷眞美氏により、本セミナーのサブテーマの「北前船交易における昆布とニシン粕の役割」を演題とした基調講演が行われた後、地元や全国からの研究発表として、北海道北前船調査会の高野宏康氏から「北前船交易における北海道の役割」、大阪市経済戦略局長の柏木陸照氏から「北前船交易における昆布の役割」、倉敷市長の伊東香織氏から「北前船交易が倉敷市のまちづくりに果たした役割」をそれぞれ発表、最後に北海道北前船調査会主宰の土屋周二氏の総括で幕を閉じました。



▲東京国立博物館館長 銭谷眞美氏による基調講演



▲小樽市立潮見台中学校文化部による発表



▲迫小樽市長による主催者挨拶

北前船寄港地フォーラム 過去の開催地



◎日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の構成市町村数（R元年度追加認定後） **16道府県 45市町**
北前船を通じて全国の寄港地・船主集落と連携し、地域間交流や地域活性化、観光振興を図っています

10/20フォーラム（石狩市）

20日には石狩市でフォーラムが開催され、基調講演やパネルディスカッションが行われました。会場には全国から約500人が集まり、北前船の歴史と文化、そして現在の港の役割やこれからの観光振興策など、専門家による講演が行われました。

オープニングを飾ったのは、北前船日本遺産の構成文化財でもある「浜益沖揚げ音頭」。浜益の小中学生と浜益小劇場がコラボして実際の舟を使った庄巻の演目でした。また、えるむ認定こども園の園児たちによる手話歌の披露もあり、手話のまち石狩を全国から来た方々に紹介しました。

基調講演では、志学館大学教授の原口泉氏が「北前船が結ぶ蝦夷と薩摩」と題して、北前船が運んだ北海道の昆布を手に入れた薩摩藩が、中国との密貿易で得た利益によって倒幕への力を蓄えていったという昆布がもたらした深いつながりを話しました。また、開催地石狩市からは、5期20年にわたり市長としてまちを先導してきた田岡克介氏が、快風丸の来航など歴史地理学的見地からの石狩の位置づけや、環境というキーワードと北極海航路によって生まれる石狩湾新港の可能性を発表し、JR北海道社長の島田修氏は道民の多くが待ち望んでいる「北海道新幹線から始まる新たな北海道の未来」を講演しました。

パネルディスカッションでは、小樽市の迫俊哉市長と石狩市の加藤龍幸市長が、それぞれの町の港や観光について紹介した後、

両市が抱える課題などを掲げ、観光庁観光資源課の河田敦弥課長から外国人観光客を呼び込むためのキャッシュレス化や体験型観光の充実についての提案をいただき、最後には両市長と河田課長とで固い握手が交わされました。



▲小樽・石狩両市長と観光庁の河田敦弥課長が固く握手



▶えるむ認定こども園園児たちによる手話歌



▶浜益沖揚げ音頭

「音楽合宿」のまち 留萌



地域資源を活かした音楽合宿

日本海沿岸に位置する港町留萌市。このまちで交流人口の創出を目的に始めた、吹奏楽に特化した音楽合宿の取組は今年で6年目を迎えました。100万人を超えると言われる日本の吹奏楽人口とその活動のひとつ「合宿」に焦点を当てたこの取組について、中心的な役割を担う一般社団法人留萌青年会議所にお話を伺いました

(取材者 荻原、宇野、守屋)

日本海沿岸に位置する留萌市は、かつてニシン漁で栄えたまちです。当時の漁業者をもてなすための「おもてなし文化」や「芸妓(げいぎ)文化」が盛んとなり、街にはソーラン節などの音楽が溢れていました。また、佐藤勝や宮川泰、森田公一といった著名な音楽家を多数輩出するなど、古くから音楽文化が根付いています。

取組のきっかけは、地元で吹奏楽の練習をサポートしていた留萌青年会議所のメンバーが、全国各地の吹奏楽関係者から聞いた「教育環境の変化により、練習機会の確保が難しくなっているため、集中して練習ができる合宿の場所を探している」という声でした。

留萌市には、音楽ホールとマーチングができる体育館が併設されているほか、大きな宿泊施設はありませんが、大人数の宿泊が可能なコミュニケーションセンターなどがあり、合宿に適している施設がありました。

こうした地域資源を活かしてスタートした音楽合宿の取組は、2015年には日本青年会議所主催「地方創生政策コンテスト」でグランプリを受賞しました。

合宿参加校も、最初は年に1校でしたが、地域からの協力や行政からの支援を得ながら徐々に増えていき、2019年は8校、延べ1000人以上が留萌市を訪れる予定という、非常に大きな経済効果をもたらすものとなりました。

また、一昨年には、東京で吹奏楽の指導にあたられていた安西氏がこの取組に共感し、音楽専門の地域おこし協力隊として留萌市に採用されることになりました。地元の高校や合宿校への指導にあたるなど、音楽合宿を含め地域の文化振興の一翼を担っています。



▶合宿練習の様子上:音楽ホール、下:体育館